

NHK朝の連ドラ「ばけばけ」ご覧になっていますか。1890年（明治23）4月、アメリカで新聞記者をしていたラフカディオ・ハーンが来日、鎌倉・江ノ島を観光したのは1892年のことであった。

その模様は「知られざる日本の面影」の中にある「江ノ島巡礼」に詳しいが、江ノ島見物の帰途、駅へ向かう路傍の庚申に惹かれた。藤沢に立派な庚申堂があると聞き藤沢駅北口遊行通り中ほどにある庚申堂を訪れている。

（現在、藤沢にあるただ一つの庚申堂、次回御開帳は2040年）



しかし、荒れた境内に落胆しながらも境内の石像群を丹念に観察し、番人に「庚申の絵を買いたい」というと、「絵は売っていないが、掛け軸があるから持つて来る」と言う。持つて来た掛け軸は埃だらけの古く黄ばんだ掛け軸で千年も経っているものらしく、日に焼けて輪郭だけのもので失望しながら見ていると、周囲に群衆が来ていることに気がついた。野良仕事から来た親切そうな日焼けした顔の百姓、赤ん坊を背負った母親達、小学生の子供、車夫などが皆、外国人はどうしてこんなに彼らの拝む神々に興味を持つのか不審がっているのだった。そして、周囲からの圧度は極めて柔らかで、しかも生温かい水が身に当たるようなものだった。庚申堂の脇には江ノ島道などから集められた庚申塔が並んでいる。青面金剛の掛け軸は60年に一度御開帳されるという。（余談だが、庚申堂の横にあった古くからの商人宿金井旅館は湘南藤沢マンションとなっていた）。何故、ハーンが庚申に関心を持ったのか、それはハーンの生い立ちに関係があった。母親はギリシア人であった。ギリシアは多神教であり、数多くの神々が存在する。

多神教の日本、八百万の神の国、初めての任地が出雲の国、それが後のハーンの人生に大きく影響を与えたのであった。ハーンが松江に松江中学の英語教師として赴任したのは、1890年8月、当初、旅館住まいだったが、91年、身の回りを世話する女中として士族、小泉湊の娘、節子が雇われた。節子から出雲の国のことなどを興味深く聞き書き取るが、松江の寒さや給与の問題があって、1年3か月で、1891年11月、熊本の第五高等学校に転任する。1894年神戸市に2年在住し、1896年、帝大の英語講師に就任、日本に帰化し小泉八雲と名乗った。八雲とは出雲国にかかる枕詞、「八雲立つ」にちなんで名付けたものである。帝大には7年勤めた後、退職。後任は夏目漱石であった。1904年（明治37年）早大講師として勤めたが、9月26日、狭心症により死去、54歳の人生であった。

小泉八雲は学校教育の他、14年間に13冊もの本を書いた。そのうちの一冊、節子から聴いた「怪談」は、私が高校2年のとき英語の副読本であった。教師は松江の島根大学教授から遠く盛岡の高校に赴任して來た先生であった。大学教授から高校教師、何か不都合な事があったのではないかと生徒の間で噂になったが、ハーンや松江の事を詳しくしばしば脱線し人気があった。70年も前の事だった。

参考資料：新編日本の面影 ラフカディオ・ハーン著 池田雅之訳 角川書店

藤沢の文学 北沢瑞史 名著出版 日本の面影—小泉八雲 池田雅之 NHK出版